

國文に漢字で書いた漢語を取り入れて読みこなして行く場合などと比較して、甚だ興味のある現象と認むべきものであらう。

## 八 本書書寫の時代

此の書の譯述、もしくは書寫の時代を知ることは、本書の研究に於て甚だ重要で、また甚だ興味のある問題である。抑も本書は前述の通り、長く塗込められた敦煌の千佛洞の一窟から獲られたもので、之が書かれた場所も沙州即ち敦煌であつたことは、次に示す本書の識語によつて明白である。さうして此の洞窟中から出たものには、宋の至道年間（九九五—九九七）以後の年號を有するものが無いから、之を塗込めたのは恐らく宋の景祐二年（一〇三五）に、西夏が、此の地を占領した際に起つた事で、西夏文字の文記の中に存在しないことも、また之に對する一個の傍證であると考へられて居るのであるから、此の見解にして據るべくんば、本書も無論一〇三五年以前に書寫されたものと見なければならぬ。併しながらスライン氏が本書と共に得た回鶻文佛典の中には、遙に時代を下つた元の至正十年（一三五〇）の跋を有して居るものがある。自分は大博英物館でその書を見た時、スライン氏の需に應じてその跋を譯したことがあつたが、氏の大著 *Serindia I* の卷頭 *Addenda et Corrigenda* にはそれが載せられてある。併し寫し方の間違ひもあり、また匆卒の際の事であつたので、多少の考違ひもあるから、改めてこゝにその全文を譯載する。この跋を有する書物は、Ch. XIX, 003 の番號を附せられて居るもので、その第四十六枚裏 (*Serindia, Plate CLXV* の下圖左参照) 第六行目から終にかけて